

〈擬制的古典的ロックコンサート〉

ロックはロック。ジャズの子供ではないしブルースの義兄弟でもない。先日、30才近い年令でロックをきき続けている人と話している時、彼はフト「年がいてもなく、ロックをきいたりして……」というよりなことばをもらした。年がいてもなく？ ロックが永遠にロックであるために、私達はいつかやってくる30才その日、ロックに美しいロンググッバイをささやかなければならないのだろうか？

そもそも、年がいてもなく、などということばで恥じなければならぬロックとは、いったい何なのだ！ などと気負い立っていても、今の私にはとても解答を出すような余裕などありはしない。「ロックにてめえの全存在をかけられるやつ」と言われて、ハイと手を上げてしゃしゃり出ることのできなかつた痛みが、未だに胸を駆けめぐる。

ロックでもないロックに、十年前足を踏み入れて以来、母とケンカをしながら、父親にドヤサレながら、それでもしがみついで生きてきた。きのう、シンライムといっしょに流しこんだあのあわれなオイル・サーディンのように、骨までヒタヒタとロックにつかりきっている。

ふと目がさめて、いつかロックに裏切られるかも知れないという恐怖におびえながら、今さら、それでもロックは私の空虚をいやしてくれた、私を疎外から救ってくれた、などといってウソぶくのはよそうぜ。心貧しい20才の女の子には、ロックしかなかったんだ。平岡正明はいみじくも「俺が転向しなかったのは、ジャズがあったからだ」と言ったそうだ。私はそんなキザなセリフは吐けないから、小さなこぶしをふり上げて叫ぶよ。ロックさまのお通りだ——悲しい道ばえは、どこまで響いたことやら。

熱い熱いロックの太陽が昇って、「オールナイト・ニッポン」または「ファー・イースト・ネット・ワーク」でロックさまの夜がふける。ロックしかなかった女の子の、あたしの運命をみてみよう。このあさましさを。イエイエ、異人さんに連れられて行っちゃったのは、何も女の子だけではないのです。こうやってタイコをドンドン叩きながら、ロックロックとはしゃいでる、おめでたい感性的なマスコミ人間なのです。

「あたし、前みたいにロックをきいても感激できないのよ——」不感症の女の子は、あの快感——いつかジミ・ヘンドリックスに犯される夢をみた——を再び求めて旅に出たのだが、行きつく先はぼろん亭であったり、ビ・バップであったりして、旅はちっともはかどらない。イザ、放浪をはり切った心も、いつの間にかなえてしまう。

ロックよ、ああ私のロックちゃん、とはっしとかき抱いて、大粒の涙を流しても、うすら寒い秋の夕暮れはタチの悪い冗談としか受けとってくれない。「若さ」「新鮮」「怒り」「自由」「愛」——ケッ！ 西武デパートのロマンシャルじゃあないんだぜ。

よく、ロックとは何なのかと聞かれて、答えられない私は苦しくなって、ビョンビョンとはねまわる。それでもわからなくて、そんな時は、ジャズって何ですか、それから音楽って何ですかと聞きなおることにしている。今はもう、ためらいがちに、目を伏せて、恥ずかしげに答える。「あたしのロック」

〈ロックコンサート〉

11月2日PM5:00~9:00

記念館

モップス

フラワートラベリングバンド

加橋かつみ

遠藤賢司

グループゼロ

頭脳警察

R・C・セクション

企画協力 山崎直樹 遠藤洋一

司会 みのもんだ
景山民夫

サマにならない、他愛ない、白けきった、どうしようもないロック。ケンさんばかりに、「ロックでなしよと夜風がさわぐ」と歌ってみて、テメエの生きるのはロックしかないんだといひませ、あとはイジだけで生きて行く。

問題意識をもつということ、ロックをきくということは、本当は全く別なことなのだけれども、私達は、いつの間にか「サインはV」に革命を妄想するようになった。

多くのロック・フェスティバルが終り、おめでたい連帯感のビューティフル・ドリームは物静かな平和を愛する若者達の間に、黙って生きていく。

ロックはますます、どうしようもなくなっている。クロスビー・スティルス・ナッシュ&ヤング、ブラッド・スエット&ティアーズ、さめていて、クールで、聖知的なイージー・ミスニング。

要するに、ロックはジャズより劣っているというコンプレックスの裏がえしが、よりロックをロックらしくする。ジャカリキになってジャズにむかってアカンペーをし、お前の母さん出べそといって、ラリー・コリエルちゃんが仲間になったよといって大よろこび。マイルス・デビス、アルバート・アイラー、ハービー・マン達も確かにロックのことをチラリとかいまみてくれはしたが、ロックのペラペラとした弾力のない軽さは、どうしようもないのだ。

今度、もし、たとえば、七二年に再び何かが燃え上がるとしたら、私達は同じバリケードを築くようなことはしないだろう。それで、たとえばロックの解放区とか、ロックのバリケードなどといったおぞましい発想をする人がどう考えを要えるかは別として、ジャズのある人達は、しきりとジャズと第三世界のコミュニケートを口にする。そこで私もここで思い立って、七二年までにロックを第一世界とのコミュニケート論云々をでっちあげようと思う。みんな突ってくれるだろう。ロックはしょせんロックだったのですね——と。

私はメメクラゲにさされた少年のように、本当は痛くもない傷口を押さえて、すつと体から血の気がひいていくのを感じるだろう。